オクソン倶楽部

1992年　初　春　号

人生と勝負と運と
谷川　浩司

　自分は運がない、という人がいます。決してそんなことはありません。運、不運というのはそれぞれの人に平等にそして公平にやってくると思います。自分で運が悪いといわれる人は、その時点で運を逃がしているのではないでしょうか。
　人によっては「運」は自分の手で積極的につかむものだ、といわれるのですから……。
　運を使わなくてすむこと、運にたよらなければいけないこと、とかいろいろあります。
　将棋の場合、大局開始時間に遅刻しますと、その3倍を持ち時間から差引かれるのです。1分遅れますと、持ち時間が3時間ですと、そこから3分引かれます。遅刻が1時間ですと3時間の遅刻ですから不戦敗となるのです。7年前ですが1月20日の大局日に大雪が降りやきもきしながら東京将棋会館へ息をきらしながら着きました。平静心をうしなっていたのでしょう対戦相手の田中寅彦七段（当時・現八段）に敗れました。まさか大雪になるとは前日まで想像もつかず、運がなかったんだ、というふうにしたのです。運というのは1日1日、その人に持っている量があるのではないでしょうか。田中寅彦八段とのその日の対局には谷川浩司に運が残っていなかった。それで負けたのだ、谷川が弱いからではないのだ、というように私は考えたのです。そう思うのが棋士の意地っ張りなところかも知れません。
　棋士は寿命のながい職業です。相撲ですと30歳すぎ、プロ野球ですと40歳すぎで限界がきます。
　大山康雄15世名人は68歳でA級のなかで立派に活躍しておられます。ながい間にはスランプもあったでしょう。私は昭和61年度に何も実績を残さず終わった年です。それをどうやって克服したかといいますと、それまで戦法の正統派とよばれていた「やぐら戦法」をできるだけ指さず、新しい戦法に取組むことによって新鮮さを取り戻したのです。採用率5割だった「やぐら戦法」を次の年度には1割におとしました。こうして新しい戦法で、それまで「だれ」ていた気持ちが転換し勝率もあがっていったのです。
　いちばんいけないと思うのは、諦めることとあせることとのふたつです。形勢4分6でこちらがよいと判断し、これを10対0、勝勢を勝利にしたいとあせって逆転される例もありますし、あるいは、いくら頑張っても結局はダメじゃないか、とあきらめる、このふたつがいけないのです。あせりとあきらめは、どちらも結論の急ぎすぎです。
　囲碁であれ将棋であれ専門棋士となるためには才能と努力だけでプロにはなれません。将棋が好きならどんなことでも苦にならないというのはたしかにそうだろうが、毎日の生活をどう過ごすか、それも10代の少年の域をやっとでた人間が10代特有の悩みと喜こびと悲しみに加えて経済的負担とのたたかいもあります。地方出身の棋士のタマゴには四段にならねば正式の専門棋士と将棋界は認めません。先輩たちの棋譜を見ながら何故この歩を突くのかの思考に明け暮れます。
　中原名人が「奨励会の初段前後で各人の将棋の骨格が決まり棋風が形づくられます。この時期の盤面との斗いが大切でその後はほとんど変わらないのです」とのべられたことがあります。
　禁欲的すぎず、そのうえ遊びすぎない精神のコントロール、このバランス感覚の善し悪いが「勝負と人生」に影響するのです。（談）
（将棋棋士・竜王、王位）

谷川浩司・プロフィール
一九六二年神戸生まれ。棋士を志し、若松政和師に入門。八三年には名人戦の挑戦者となり、加藤一二三名人を敗り、タイトル戦初登場にして二一歳の史上最年少で名人位となる。現在九段で王位、竜王の二冠王。

お正月は、1月6日から平常通り営業いたします
店主